慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マーガレット・ コール著 革命のなかに成長して
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.9/10 (1954. 10) ,p.987(117)- 988(118)
JaLC DOI	10.14991/001.19541001-0117
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19541001-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

樺的・トラフィーク的な部門に投下され、結局國民的生産力の形成へ連なるとは云えないのではないか。ロトド・アイランド型に於ても、生産工程へ直接タッチせず、寧ろ流通部門を擔當し、資本の附加的投下は自己資本により行われ、商業資本は次第に相對的重要性を失つて行く點。而してそのパートナーの中から次第に富を蓄積し、産業資本家へと成長して行く者も現れるが、商業資本は競爭者の出現を恐れて之を獨占的に抑止せんとする動きを示す點。前貸制の性格をどう規定するか。パートナーシップの內容、最後に販賣組織の問題等々。之等の問題の解明には勿論彼地に於ける特殊研究の進展に俟たねばならぬが、ここでは與えられた紙數の關係上、スミスの近業「フォール・リヴァーの綿織物業」を僅かに上述の問題點に卽して紹介するに止める。――

ロード・アイランドに於ける綿工場設立はプロヴィデンス商業資本に加えて多くの土着（農民・職人）資本と、英・蘇蘭技術者の援助により行われた。この水力工場は紡績工程のみ行い、準備・織布工程は手勞働により工場外で行われ、勞働力は最初は周邊地方、後には更に內陸タウンから供給された。その成功はこの地方を刺戟し、多數の工場が設立された。Fall River Manufactory（一八一三年設立）は資本金三萬弗（六〇株）、內技術者に一五株、その從兄弟六株、土地及び用水權提供者四名に合計二三株、殘りは大部分はフォール・リヴァー其他の住民たる一一名に一―二株宛分配された。Troy Cotton and Woolen Company は資本金五萬弗を百株に分け、土地・用水權提供者等に總株の半分を、殊り五〇株をフォール・リヴァー其他の住民二〇名に分配した。この種の多數の工場は一八一四年の恐慌と一八一五年以後の英商品の氾濫によつて閉鎖を餘儀なくされた。この危機を乘切る爲にはボストンの大商業資本によるローウェル型工場の登場をまたねばならぬ。ボストン商人は用水權を購入して直接工場設立に參加するか、又はこの用水權を賃貸して收利せんとし、或は工場用建物を河川沿いに建て之を個人又は會社に賃貸する「賃貸工場」等の諸方法によるのが織物業中心地では普通だつた。フォール・リヴァー周邊の鐵工場設立の事情も綿工業の其と略々同じであり、鐵工業者と綿工業者とは、或は同一人又は親戚であり、或は土地・用水權の所有・貸借關係を通じてフォール・リヴァーの支配階級を構成していた。

フォール・リヴァーの二工場 Fall River Manufactory 及び Troy Company について資本の源泉を地域的に見れば、その約八一％はフォール・リヴァー及び周邊のタウンにその源泉を有し、之等二工場を含む五工場に就ての其は五九％弱である。一八二〇年代にはプロヴィデンス及びニュー・ベドフォードからの投資が見られるが、之は五工場の全資本の約三二％を占めるに過ぎず、その一部は一時的投資で追加投資は行われず、資本の源泉としては重要ではない。寧ろ地方的資本が自己蓄積して行く傾向が次第に重要となつて行き、原資本より附加資本が重要性を增して行く。（The Iron Works が好例）。上記五工場の原出資者五二名中一七名は總資本の約八六％を占め、(1)不動產所有權(2)製造業(3)海運・商業にその源泉を有している。(1)は土地・用水權提供によるか、農業からの蓄積による資本、(2)は製造業（主に綿工業）及び商業による資本、(3)は地方的及び都市の海運・造船業者・船主の資本である。總じて地方的な、平均出資額以下の無名の小出資者（農民・船長等）が最も重要であつた。

綿工場の經營能力は商業・造船業・製粉業・製材業・農業の經營から繼承された。地方的な農民・職人の子弟はロード・アイランドの諸工場で訓練を受けて、フォール・リヴァーの技術者・製造業者となつたが、フォール・リヴァーの發展後は此處の工場で訓練を受けた者が次第に重要性を增して行つた。一八四〇年代になると英・愛蘭からも勞働力が流入する樣になつた。

斯くてフォール・リヴァーは立地條件と土着資本に惠まれていたが、水力が比較的小規模で、ボストンの大資本を惹付ける程の條件を持たなかつた。（以上）

以上のスミスの分析により（紙數の關係上詳論するのは次の機會に讓るが）我々は、見られる樣に、ロード・アイランド型工場の成立史に於ける空白をかなり埋める事が出來た。彼地に於ける最近の同樣の工業都市等の史的研究、例えば Holyoke (Mass.), Naugatuck (Conn.), Peacham (Vt.), Chicopee (Mass.), New Bradford, Brooklyn, Norfolk, Memphis, Rochester, Cleveland, Chicago, Detroit, Milwaukee, Minneapolis, St. Paul の研究はハーヴァードの經營史的研究と共に我々の期待する所大である。（一九五四・七・二〇）

（中村勝巳）

書評及び紹介

マーガレット・コール著「革命のなかに成長して」

Margaret Cole; Growing up into Revolution, 1949, London, pp. 224.

第二次世界大戰が終つた直後、回想錄や自叙傳というようなものが、一時わが國の讀書界をふうびしたことがある。まだ、さめやらぬ戰爭の興奮と、ともかくもあのいやな戰爭がおわつたという解放感のいりまじつたなかに書かれたたくさんの回想もののなかには、もちろん良心的なものもあつたが、しかし、いかがわしいものや威勢のよすぎるものもまた決して少くなかつた。戰爭中の自分の非良心的な行動を正當化しようとしたり、また自分を英雄にまつり上げたりするようなものばかり多くて、すなおに前非を悔い新しい出發を誓うというように、われわれの心の奧に訴えるようなものが、あまり書かれなかつたのはまことに殘念であつた。

外國の事情はよくわからないが、そういう意味では、このマーガレット・コール女史の「革命のなかに成長して」などは良心的なものの一つであるといえよう。ここに云う革命とは、特に革命的な一つの事件をさすのではなく、二十世紀初頭から第一次大戰をへてファシズムの興隆、そして第二次大戰と云う、まことに激動と苦悶の半世紀をさしたものであり、そのなかで著者がどのように成長し、どんなことを體驗し、何を喜びそしてまた悲しんだか、色々なエピソードとともに語られている。それは一人の女性の傳記であるばかりでなく、さながら二十世紀英國社會の縮圖でもある。著者マーガレットは現在、勞働黨の理論家として、またその尨大な著書をもつて有名なオックスフォード大學の敎授、G・D・H・コールの夫人であつて、彼女自身もまたリヴァプール大學の敎授としてすでに多くの著書がある。マーガレットの文章は女性らしいデリケートな描寫ではあるが、夫君コールの流れるような美文に比べると讀みにくいことおびただしい。そのためかコール夫妻の偉大な先輩であつたシドニー・ウェッブ夫人、ベアトリースの自叙傳「わが修業時代」に比べると、いささか物足りない感がないものでもない。しかしこの書のなかにもられているエピソードのなかには興味深いものがあるので、その二三をひろつてみたいと思う。

まづ、せまり來る戰爭の危機、さけがたい第一次大戰を當時のイギリスの青年たちはどんな氣持でむかえたであろうか。イギリスはすでに一八九九年から一九〇二年にかけて、いわゆるボーア戰爭によつて、南アフリカの一角にオランダ系移民がつくつたトランスヴァール共和國を攻めほろぼして、そのろこつな侵略政策は世界の人々のいきどおりを買つたものであつたが、この戰爭を序曲として英國にも、ひしひしと大戰の氣配はこくなつていつた。一九一四年戰端がひらかれるや、青年たちのなかにはこれが未曾有の大戰に發展するのではないかという不安を本能的に感じたものも少くなかつた。そしてこういう青年たちは自分の信念によつて戰爭反對、徵兵拒否の態度をとつたのである。これらの人たちは〝良心的反對者〟と呼ばれたが、とくにクウェーカー教徒たちは絕對的平和主義者として最後まで戰爭反對の態度をかえなかつた。だが一九一六年ついに陸軍徵兵法が制定されるや、これらの人たちは國賊・反逆者と呼ばれ、要注意人物としてブラック・リストにのせられ、その數は四萬七千名にも達したといわれる。こういう人たちは、收容所にいれられ、なかにはフランスにおくられて銃殺にされたものも多かつたのであつて、このことをマーガレットは感慨深げに書きしるしている。(pp. 58—60)　そしてわたくしもまた感慨深くここを讀んだのである。

つぎに、コール夫妻がウェッブ夫妻の後輩であることはさきにのべたが、やがてコールはギルド社會主義をとなえてフェビヤン社會主義に反逆したことは有名である。のちに二人は和解するのだが、しかしマーガレットの語るところによると、不和の原因は思想の上ばかりではなかつたようである。たとえば、ウェッブ夫妻はフェビヤン調査部にははげしい仕事と資料のたえまない蒐集をやらせておきながら、調査員たちには低賃金を

強いて賃金値上げに反對し、絕對にゆずらなかつたそうである。(pp. 64—65) 低賃金の實態の研究に沒頭していたウェッブ夫妻が、みずから、その調査員たちに低賃金を強いなければならなかつたとは、何と皮肉なことではないか。若き日のG・D・H・コールがウェッブ夫妻にそむいたのも、案外こんなところにその理由の一つがあつたのかもしれない。(一九五四・六・一九)

(飯田　鼎)

『財政學』

U・K・ヒックス著
巽博一・肥後和夫譯

現代の經濟學諸部門に於ける理論の發展が經理學一般理論との深い內面的結合という紐帶の下に押進められた如く、財政理論も同じ紐帶の下に同じ展開軌道の上に乘つて間斷なき新展開を示そうとしている。その動向はカメラリズム的殘滓を纏つた「既成財政學」が、尨大な自己完結的・技術的體系の支配下にあつて傳統的固定的問題領域の內に跼蹐し、財政學プロパーの課題を追求した態度との間に埋め難い落差を殘している。尤も此處ではもたらされた落差に照應する歷史的・現實的基盤自體に對する假借なき批判・檢討を直接目的とする事は出來ない。少なくともヒックスが描いた「財政學」の全章に流れている基調は、その期待を容易に裏切るだろう。この事實は、H・ドールトン・M・E・ロビンソン、A・C・ピグー等の厚生經濟學的英國財政學書の系譜に親しんだ人々には、これ又容易に首肯できる事と思う。

しかし「財政學」が有する基本的理論構造、分析手法、そして又具體化された敍述形式を覗い知るならば、ドールトン以下の著書に對して有する「財政學」の新たな側面と優れた特質とは自づから顯現せざるを得ないだろう。端的にその諸特質を擧示してみる。(1)、規範部門としての財政學は、ヒックスを驅つて新厚生經濟學の價値視點よりする「客觀的」政策基準を撰擇せしめる。所謂產出高の極大化＝「生產の最適狀態」と滿足の極大化＝「効用の最適狀態」の二公準が定式化される。(2)、このように財政政策の究極的基準をば雇用を超えて經濟的厚生に求める事は、原理的にもケインズ理論の分析手法を排除することにはならない。逆に讀者はケインズ以後の財政理論の成果が「財政學」に於て見事に攝取・消化されている事を看取するだろう。(3)、加うるに英國財政史及び財政制度に對するヒックスの並々ならぬ學識と洞察力とは、その實證的財政學研究の各分野を貫いて現代財政收支の規模・構造・機能等の優れた浮彫を可能ならしめている。玆では理論が常に現實の內に交流せしめられ、理論は理論・現實は現實として分離する所謂財政學の白痴化は見出し得ないだろう。

三部（廿章）のプロローグをなす第一部（六章）「政府勘定」は、まづ統一的國民經濟組織內に於ける異質的な、然し相互に密接不離の關係にある國家經濟（財政部門）の地位を確定する事より出發する。それはヒックスの場合社會的共同欲望充足の機能を果すべき機關としての財政體が、「生產者及び雇用者として立ち現われる」事を意味するに外ならない。しかしこの財政機構の主體者たる國家自體に關しての立ち入つた省察は見出す事が出來ない。卽ち、戰前より戰後に到る政府支出及び收入の構造・豫算の編成・執行・決算・卽ち支出統制の技術的過程・國民經濟に於ける政府統合勘定についての詳述等、主として英國に素材を求めての財政制度及び財務行政一般に關するヒックス獨自の分析とサマライズに終始している。この點特に現代英國財政研究を志ざす人々にとつては、被益する所尠からざるものがあるだろう。

第二部（十章）「租稅論」は、第一部に於て試みられた財政の現狀分析を基礎とし、租稅論を中核としたヒックス財政理論の展開が實現される、その主題への新らしい接近方法こそ、我々は種々の觀點より注視すべきであろう。例えば周知の傳統的租稅分類法（轉嫁の有無を基準とする直接稅・間接稅の分類等）は打捨てられ、一般稅と部分稅、又は所得・資本稅と支出稅に置換えられる。前者の分類については、ヒックス自身「本來便宜的なものであつて論理的なものではない」事を强調する如く、その區別は經濟學一般理論が個別的經濟單位（各企業等）の立場よりする部分均衡的接近が有利な場合と、國民所得水準決定の要因たる消費・貯蓄・投資に關する一般分析が必要とせられる場合とに夫々對應すると考えられる。後者の分類に於ては、傳來の租稅轉稼論に對するヒックスの疑義と近年論爭の一課題となつた國民所得に於ける政府生產物の解釋に對するヒックスの見解とが反映され積極的提言となつて現われている。この分類形態それ自體についてはヒックスの場合特に新らしいわけではなく、その前著、The Finance of British Government, 1920—1936, (1938) に於て既に見出すことが出來る。然し夫々の租稅が內包する所の特性については、申すまでもなく「財政學」の存在理由を確保する如き意義が附與せられている。卽ち、從來の轉稼分析の躓きの石であつた所得稅はその視點をピグーの如く納稅者の消費、勤勞及び貯蓄に與える効用効果に移すことにより回避するのではなく、「市場における財の交換價格に含まれているものは支出稅だけで所得稅は